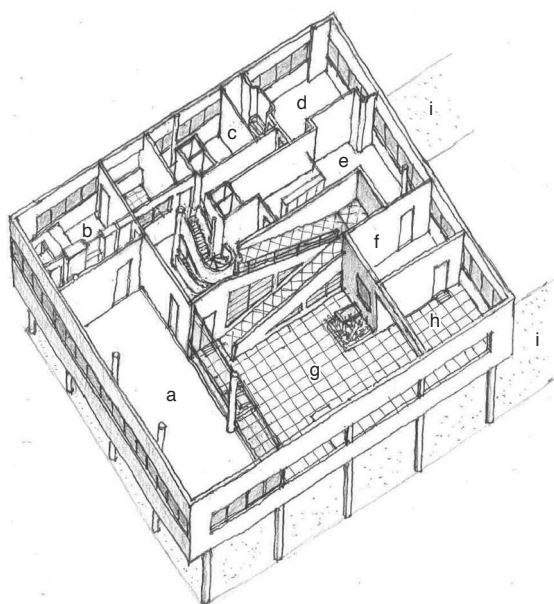


サヴォワ邸 1931年 ル・コルビュジェ



北西側外観 屋上に日光浴の場の風除壁



2階軸測投影図 :a広間 b厨房 c客室 d子ども室 e寝室 f居間
gテラス h有蓋テラス i車路



上左 斜路、左側に階段 上右 広間からテラスを見る
下左 有蓋テラスから広間方向を見る 下右 階段

機能充足と空間体験の統合

パリのフランクリン街のアパート（1903年）を設計したオーギュスト・ペレの下に、1908年、スイスから建築を志す青年が訪ねてきて15カ月働いた。青年は第1次大戦に突入した'14年、住宅の大量生産を視野に、ペレに学んだRC造によるドミノと称する住宅の架構モデルを提案する。その後、ル・コルビュジェと名を変え、モデルにもとづくヴィラの設計を重ね、'26年には近代建築の5要点——①ピロティ、②屋上庭園、③自由な平面、④横長水平窓、⑤自由な立面——を発表する。その集大成がサヴォワ邸である。

敷地はパリ郊外のポアッシーにあり、当時は雑木林が混じる田園だった。建主はパリで保険会社を経営するサヴォワ氏夫妻で、子ども一人の家族の週末住宅である。要求を細かにしたためた夫人の手紙が残されている。

特徴は、19m×21.5m×高さ3.5mの白い矩形の主階を柱で支え挙げ、全体を縦貫する斜路を中央に設けたことだ。

1階は使用人室とガレージを車の回転半径に従うU字型に囲み、外周ピロティは車路とし、北側中央に玄関を設けている。入ると白い螺旋状の階段と斜路が並び立ち、斜路を上ると明るさを増し、2階で外に出て屋上へ至る。階段も同様に屋上まで延びる。ゆっくり斜路を上り、階段で降りる。その逆も可能な縦の循環径路がつけられている。

2階は、人工地盤上のコートハウスにたとえたいところだが、家族の個室、寝室等の諸室は水平連窓付きで外向きに斜路の東南側に詰め込まれ、西側の屋外テラスには広間と私的な居間のみが面する。しかし夫妻は斜路をコアにテラスや広間を巡り周回できる。

つまり、垂直、水平に織りなす回遊性がある。

広間のテラス側は床から天井までのガラスサッシで幅約9.5m。半分が1枚ガラスの引戸で、開ければ内外一体化する。テラスには1台の固定テーブルがあり、奥には有蓋のテラスがある。斜路で上る屋上には一部湾曲した壁が建ち、風除けとなって日光浴の陽だまりをつくる。室内、屋外、半屋外空間が併存し、多様なくつろぎの場を用意している。中央の天空に開くテラスは光の受容器でもあり、床の反射光は広間の天井に反映する。

広大で制約の少ない自然豊かな敷地なのに、車を狭いピロティに引き入れ、大地との連続性を断って2階を主空間とするなど不自然なのだが、白い仮面のような単純な壁の内に、落ち着く場と縦横の移動にもない経時的に出会う光景が感興を生む空間の仕組みを蔵している。

条件があれば、機能充足とスピリチュアルな空間体験を統合する機構を創りえることを、モダニズム建築の動向に示して意義があり、影響は現代におよぶ。